

普段から田舎暮らしをしている私のような者が、たまに東京へ行ってみたりすると、びっくりするようなことがあったりするものです。

あれは確か、二年前の丁度今頃のこと。私があの男と遭遇したのは、全私保連予対集会へ出かけたときのことでした。何しろ田舎者ですので、少し早目に到着してしまい、明日の保育園での土産話でも見つかるかと、会場周辺をキョロキョロしながら歩き回ってみました。

「やつぱり、違ふなあ、この辺を走っているのは…」などと思いながら車の流れに見とれていたら、中でもとくに豪華な車がすーっと寄ってきて、私の横に止まったように感じました。

助手席の窓が徐に開き、その男は妙に無表情な顔で私に手招きをしているように見えました。後ろを振り返ってみても誰もいないので、やはり、私なのです。「…とくに怪しい者ではありません」という言葉に安心して近づいた私に、その男は箱を一つ差し出すと、「…これ、もらってくださいませんか…」というのです。私は、「中身は多分、金太郎の貯金箱で、腹掛にロゴが入ったヤツに違いない」とは思ったのですが、一応何が入っているのか聞いてみました。

「…別に、変なモノではないです」と、その男が蓋を開け、中にあったのは、キンキラ金に

光り輝くドデックス（仮称）の腕時計、しかも、大小セットになった夫婦時計？ だったのです。

「ある意味、変なモノじゃないか…」と思っただ私は、次の瞬間には、「その箱はもらえない」といつて立ち去る私に変わっていました。

その男は、相変わらずあの妙に無表情な顔で、ずっと私を見続けていました。

私は歩きながら、たつた今あったこと、自分

風

神話

者の木こりのハンスと、湖の女神様の話です。

人間というのは、人生の課題と向き合ったときの道具を無意識にもっているものですが、多くの場合、それは幼少期に手に入れるといわれています。人生の激動たる黎明期に得たものが、その後神話となり、その人生を守り続けていくられるのかもしれませんが、それは人に限らず、国や民族、企業、そして保育園も、時代を越え

がなぜそうしたのか、考えていました。「確かに、迷ったけど、考える余裕もなく、無意識が今までの人生の全データファイルを瞬時にスクロールし、その結果出てきたもので行動が決まったはず。では、その出てきたものは…」と考えた途端、愕然としてしまいました。何とそれは、私が保育園児だった頃に読んでもらった「金の斧、銀の斧」の物語りだったのです。あの正直

がなぜそうしたのか、考えていました。「確かに、迷ったけど、考える余裕もなく、無意識が今までの人生の全データファイルを瞬時にスクロールし、その結果出てきたもので行動が決まったはず。では、その出てきたものは…」と考えた途端、愕然としてしまいました。何とそれは、私が保育園児だった頃に読んでもらった「金の斧、銀の斧」の物語りだったのです。あの正直

栃木県足利市・小俣幼児生活園園長
大川 眞

て歴史を重ねてきたものそれぞれに、最も高い意識でその本質と向き合った時代の理念が、神話として受け継がれているのかもしれない。私たちは今、日本の保育について、その神話を読み直さなければならないところに立っているように思います。私は、児童憲章のみならず、保育制度の中にも、日本の保育の先駆者たちが遺してきた神話を感じざるをえないのです。